

第 69 回 企業活性化研究分科会・議事録

< 第六九回 2014 年 7 月 12 日 (土) 時間 : 13 : 30 ~ 17 : 00 於 : 専修大学 (神田校舎) >

参加者 : 尼野、井端、大野、杉本、夏目、浜田、宮川、山本 (8 名)

1. テーマ : 再生企業の分析 - 株式会社リンコーコーポレーションの場合 -

- ・ 報告者 : 夏目拓哉 ・ 配付資料 : 10 枚
- ・ 報告内容の要旨

本報告は、株式会社リンコーコーポレーション (以下、リンコーとする) の収益性と企業の再生について検討した。まず、リンコーの収益性指標を分析したところ、ROE について、平成 18 年以前と比べて収益性が低下していると分析した。EOL に関しては、EOL を構成する λ が 1 を超えていることから安全性の低下を指摘した。また、売上高と資産の相関に関して、売上高では対象が大きすぎるため、セグメント別に相関を取る必要があるという議論が生じた。次にリンコーの内部統制における問題について、内部統制の取り組み、監査の実施状況、さらには監査業務の重要性を指摘した。

以上のことから、リンコーが再生するには、安全性を高めるために自己資本に対して負債の割合を下る必要がある。また、リンコーは現在、再発防止のために実施されている内部監査部門の権限強化等の再発防止策を徹底することで再生する可能性があると考えた。

2. テーマ : 収益性分析 - 株式会社リンコーコーポレーションの場合 -

- ・ 報告者 : 山本洋信 ・ 配付資料 : 8 枚
- ・ 報告内容の要旨

本報告は、はじめに収益性指標について事前配布資料と比較検討をした。事前配布資料との違いに関しては、各指標算定時に考慮すべき金融費用と手形の裏書・割引を算定式に入れていることで ROE の数値に変化が生じるため、注記情報に注意する必要があるとした。次に、機関投資家が投資分析をおこなう際、経営者は ROA の数値が小さい時に重点的にみる必要があり、ROE を扱う上で注意すべき点を指摘した。たとえば $ROA - I < 0$ となる場合には、調達した総負債を I に比べてより高い ROA で資産運用することができておらず逆転となるため、収益性を評価することができなくなる。従って、 $ROA - I < 0$ となる場合には、ROE を分析に用いることができない点に注意する必要があると指摘した。

3. テーマ : 粉飾分析 - 株式会社リンコーコーポレーションの場合 -

- ・ 報告者 : 井端和男 ・ 配付資料 : 3 枚
- ・ 報告内容の要旨

本報告は、リンコーの粉飾における問題を分析した。粉飾を防止できなかった要因として、子会社の経営陣が主導したことで内部統制が機能しなかったことをあげた。経営陣が主導する場合以外にも、海外子会社に対する内部統制も機能しにくいという議論が生じた。また内部統制に関しては、リンコーは粉飾防止のための厳しい規則を定めていた。しかし、この厳しさが過去からの継続取引企業に対する規則の軽視を招いたのではないかと指摘した。

4. 今後の予定について

- ・ 8 月 2 日 (土) 分析企業 - 第一中央汽船株式会社 - 大野先生
- ・ 9 月 20 日 (土) 分析企業 - 株式会社リソー教育 - 宮川先生

(文責 : 浜田勇毅)